シリーズ

発達に違いのある子どもたち

発達に違いがある子どものコミュニケーションを理解する（後編）

卒業生のD君

昨年までまいすてっぷに通っていたD君は、高校卒業と同時にまいすてっぷを卒業しました。彼は自閉症スペクトラム障害と知的障害があり、自立訓練（生活訓練）の通所事業所で、自立に向けて、日々さまざまな実践練習に励んでいます。

D君がまいすてっぷに通い始めたのは中学1年生の春でした。当時D君は、自分や他者の状況を正しく読み取ることやその時の感情を理解し表現することが難しく、視覚的手がかりをもとに、状況理解や感情の学習を行い、ゲームを通して他の人とやり取りをする中で、勝ち負けや嬉しい、悔しいなどの気持ちを共有する経験をしました。

D君のコミュニケーション能力の発達はゆっくりで、喜怒哀楽のすべてを認識することが難しく、嬉しい、楽しいなどの快の感情表現が中心で、怒りや不安、心配、悲しみなどの不快な感情表現は難しい状況にありました。

学校でクラスメイトにちょっかいを出されても、怒ったり、泣いたりすることができず、笑った顔で反応をしてしまい、周囲から誤解を受けることがよくありました。

D君の中に、不快な気持ちがないわけではなく、そのことを表現する術がないということです。

「悲しみ」の感情に関しても、悲しむ＝涙を流して泣く、という解釈をしており、嬉しくて泣くことや涙をこらえて悲しむことは、理解が難しいことのようでした。

D君の感情の発達

中学3年生の秋に「悲しみ」の感情を学習しました。D君のこれまでの経験で「悲しい」ことはなかったか尋ねてみました。D君は、1年ほど前におじいさんが病気で亡くなり、お葬式があった時のようすをよく覚えており、詳しく話してくれました。

D君は、お母さんの妹の叔母さんは、おじいさんの死を「泣いて悲しんでいた」と表現し、お母さんの弟の叔父さんは「安心していた」と表現しました。

叔父さんにとっては父親であるおじいさんの死が、悲しくないわけはないと思ったのですが、なぜ「安心していた」と感じたのかD君にたずねてみると、「叔父ちゃんは泣いていなかったから、悲しんでいなかった」と答えました。泣かずに悲しむ表情の解釈が難しく、安心しているように見えたのでしょう。それを聞いて私は、泣いていなくても悲しいということを、どのように説明したら良いのかわからないまま、その日は学習を終えました。

それから2週間後、D君といつものように感情の学習をしているときに、再びお葬式の叔父さんの話になりました。D君は自分から、「叔父ちゃんは泣いていなかったけど、心で悲しんでいました」と言いました。私は驚き、お母さんが教えてくれたのだろうかと確認したところ、お母さんは何も教えていないと言われました。D君はおそらく自分で気づいたのです。そして、自分も悲しかったことを伝えてくれました。自分自身も泣いていなかったので、悲しんでいたと言えなかったのかもしれません。

「違い」を受け入れられる社会へ

D君のように、発達に違いのある子ども達は、独自の解釈ではありますが、この社会の中で起こっているさまざまなできごとを、自分なりに理解しようと努力しています。しかし、そのやり方がその場にそぐわなかったり、解釈を間違え不安になっていたりということもよくあります。それでも、仲間になりたくて努力する姿を見ていると、彼らだけを努力させるのではなく、私達も彼らに寄り添い、その違いを受け入れる努力を怠らないことが大切だと思います。発達に違いが有る無しに関わらず、人の違いを否定せずに理解することは、生きていく上でとても大切なことではないでしょうか。

文書寄贈
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」
☎(23)6255